

民間説話の変貌

——洛陽橋にまつわる物語について——

福建省泉州府内に、歴史的にとても有名な洛陽橋が、洛陽江の上にかかっている。橋の北端は惠安県の洛陽街にたつらなり、南端は晋江県の橋南郷という田舎町に属する。はばひろい洛陽江の上にかかっているこの橋は、華南地域でも大きい橋の一つにかぞえられ、年代から申しても、一千年ばかりもたった歴史的な存在である。

地方文献の記載によれば、この橋はあの有名な「茶録」を著わした蔡襄が、宋の時代に建造したものだそうである。この橋はなん百年かたった明の時代には、砂が橋もと一帯に高くうづもり、潮がくるとに、河水が橋の面まであふれ、人びとは潮水がひくまでまたなければ、その橋が通れないあり様であった。

明代のはじめごろになってから、泉州府南門外に住んでいる大金持ちである李五という者が、莫大なお金を出して洛陽橋をもっと高く改築した。これは非常に立派なことだったので、噂が全国にひろまり、洛陽橋もおかげで有名になり、この橋にまつわる民間説話がいくつか、泉州を中心とした華南地区及び華南から移民の多い台湾にもつたわっている。

まず、蔡襄が宋代にこの橋を造った経過について、神話のないい伝えから紹介してみよう。

宋代以前は、この洛陽江の上に橋がかかっているないので、惠安県と晋江県の交通は、一匹の大きな烏龜（黒い龜）によってなされて

施 翠 峰

いた。その龜というのは、なん百年前からずっとこの河にすんでいて、もうとうの昔に龜の精になっていた。この龜さんはよく人びとのいうことをきいて、河を渡るものがあれば、その背なかにのせて、向う岸まで送りとどけるといふ世話ずきなやつであった。この龜が渡船の役わりをつとめていたので、この渡し場は「烏龜渡」とよばれていた。

ある日のこと、大きな腹をかかえたひとりの奥さんが、渡し場に来てきた。龜さんは例の通り、背中にのせて泳いでいるさい中に、突然そらがかきくもり、いなづまがピカ／＼光り、大風が吹きだしたので、龜さんはびっくりして、思わず河底に潜ろうとした。

もっと驚いたのは背中にとっていた奥さん、河底に潜られては一大事、思わず天に向って祈った。

この時、たちまち空の上から大きな声が伝わってきた。

「龜さんよ、河底に潜ってはならぬ、そなたの背の上ののっているのは、蔡学士様であらせられるぞ、必ずすくってあげよ。」この声をきいて、龜さんはおちつきをとりもどし、安全に奥様を向う岸まで送りとどけた。渡場でこのあり様をみていたひとびとは、蔡学士とは誰のことか、皆目わからなかったが、やがてその奥さんが子供を生み、その子供が成長して京城での国家試験に通過し、「状元」の資格を獲得し、あまつさえ、「大学士」に昇進して、故

郷に錦をかざることになった。この時に至って、郷里の人びとは、はじめ、あの日亀さんの背中の中にとっていた婦人は蔡学士の母上で、天の声がいわれた蔡学士というのは、お母様の腹の中にある胎児をさしていたことが判明した。

蔡学士は故郷に帰ってから、母の昔の遭遇をきき知り、この河の上立派な橋をかけることを決心し、各地を奔走して、献金を募り、とうとうその願いがかない、郷里に大きな貢献をもたらしたわけである。

この民間説話は、筆者の親友である吳瀛洲氏（68才、実業家、台北市依住）が語ってくれたもので、吳氏は戦前商用で厦門、上海などに長年住んだことがあり、華南一帯の風俗習慣や伝説などに詳しい方である。この話をきいて、筆者はこの物語の源もとになる歴史的資料がないだろうかといろ／＼さがしたら、意外にも、清朝の書籍「閩中撫聞」に次のような記載があるのを発見した。

「洛陽橋がまだ建造されない前は、渡船によって兩岸の交通がたもたれたが、船が航行中に暴風にあたりして、沈没する場合もある。数多くの死者を出したことがある。宋代の大中年間、渡船が男女の乗客を満載して、河の中流まできた時、にわかの大風が吹き、江水があれだし、今にも船がひっくりかえろうとした時、船客たちは突然上空から伝わってきた声をきいた。

『蔡学士がこの渡船の上に乗っておられる、われ／＼は助けてやらねばならぬ。しばらくすると、風もやみ、波もおだやかになって、乗客たちは皆無事に岸に着いた。乗客たちは命がたすかったことを喜ぶとともに、『蔡学士』とはどなたかと尋ねたが、乗客のなかには蔡という姓のものはない。ただひとりの中年婦人の夫が蔡という苗字であった。婦人はこの時ちょうど

身ごもっていたので、その場に跪いて天の神様に向って、こうお祈りした、『私は今お腹のなかに子を宿している。もし将来うまれるのが男の子で、大学士の位にまでつけたら、必ずこの河をわたる大きな橋を造らせましょう』と。なんか月後に、果して婦人は男の子を生んだ。その名前が蔡襄で、大きくなってから京城の国家試験で『状元』に合格し、泉州郡太守の要職に任じられて、故郷に帰ってきた。その老母である婦人は、昔の事を思い出し、蔡襄に洛陽橋建造のことを話し、遂にこの大きな仕事をやりおえたのです。』

「閩中撫聞」のこの記載は、「空から伝わってきた声」の部分を除いて、比較的歴史的事実に近いかと思う、「烏龜渡」の神話は、この事実を幻想化してきたもののように思われる。渡船が神話の中では、「烏龜」の精にかわって、神秘的な色彩を帯び、この存在が又「空の声」とよくマッチしている。民間説話にありそうな想像のしかたである。

この「烏龜渡」の続篇ともいえるべき物語に、「李五洛陽橋を造る」というのが、泉州一帯に伝わっている。国立北京大学・中国民俗学会共同出版の「民俗叢書」第一三八巻「福建伝説・謎題」の中に、この伝説が掲載されている。ここにそのあらましを訳しておく。李五は泉州の有名な大金持で、財産が数百万両もあり、職工を家のなかに雇って金や銀の馬を作って、ひそかに後庭に埋めているとのおうわざであった。しかし李五は貧乏人に対してはよくいたわり、地方のためにもよく金を出していたから、評判のよい方であった。

ある日のこと、李五の妻の弟がお金をせびりに来た、たちのよくない人なので、李五はそれを断ったのみならず、平常のふしだらな生活をもさとしてから帰らしたら、その怨うらみがもとで、弟は李五が海

賊と結んで謀叛をたくらんでいるといつて、官憲に訴え出た。そのため李五の財産は全部没収され、審判をうけるために、京城につれていかれた。

李五が囚車の上に乗って、洛陽橋の前までさしかかった時、ちょうど満潮の頃でしたので、河水が橋をおおいかぶさり、一時通行禁止の有様であった。李五はこの時、思わず後庭に埋めておいた金馬・銀馬のことを思い出した。自分は弟におとしいられて、どうなるか分らない身であるが、ひよっとすると後庭の金馬・銀馬はそのまま誰も知らずに池の下に埋もれてしまいかも知れない。そうと分れば、早くあの金や銀で、この洛陽橋をもっと大きく改築すればよかったのに、とつくづく感慨無量であった。

「もし私が無事に泉州に帰って来たら、必ずこの洛陽橋を改築して三尺高くしよう。」李五は思わずこうひとり言した。

この時、群衆のなかに、石屋の主人と繩屋の主人がいた。ふたりは李五のひとり言をきいて、せせら笑った。「李五、お前は夢を見ている。もしお前が帰って来てこの橋を造り直すなら、私たちも材料として店の石や縄を全部あげよう。」

やがて、李五は都に送られて、なん回も裁判を受けたが、証拠不足でそのまま監獄に入れられたままでいたが、なんか月後に、皇帝の愛妃が急病になったので、皇帝はその恢復祈願をこめて、特赦令を出した。李五もそのおかげで釈放され、故郷の泉州へ帰って来た。李五は家に帰るや、池の水がまだ一杯なのを見て、ほっと安心し、急いで工人をよんで池を掘りかえして見たら、金馬と銀馬は皆無事であった。彼はその金銀を全部売ってお金にかえ、洛陽橋改造の費用にあてた。前に李五をせせら笑った石屋と繩屋の主人は、しぶく石材と縄を出した。洛陽橋は三尺も高くなり、人びとはいつでも安

心してこの橋を渡れるようになった。

この民間説話は、いはば明朝に洛陽橋が改造された経過を語る伝説として泉州一带に広く伝わっている。ところがこの泉州伝説が清朝の頃、台湾に移住して来た泉州系の人びとによつて台湾にも伝来されて後代の現在までも語り伝えられている。ただ、その内容がより複雑に潤飾されて、立派な民間文芸としての昔話に変貌している。次に私が一九七五年現地採取で取材した昔話「李五と旅人」を紹介しよう。

昔、福建省の泉州に李五というお金持さんがいた。貧しい人にお金を与えたり、困っている人を助けたり、善行をすることに生きがいを感じていた人で、土地の者から神様のようにうやまわれていた。ある日のこと、李五の家に身なりの立派な旅人が訪ねて来た。この人は山東省の者で商用のため泉州に来たのですが、長い船旅で悪人に誘われるまま、ついに賭博の仲間入りしたところ、だまされて余分の金はもちろん、旅費さえすっかりまきあげられてしまった。

やがて船は泉州につき、無一文になったこの旅人は、どうしてよいやら困ってしまった。この時、旅人はこの土地の長者李五の噂を聞いて、早速たずねた。

李五の邸宅の立派さは大したもので、旅人は心よく迎え入れられ、暖いもてなしのうちに一夜をすごした。翌朝になり、

「お早ようございます」

女中は銀製のたらいに洗面用の水を入れて運んで来た。

「やあ、ありがとう」

旅人は気がるに礼をいうと、さっさと顔を洗って、銀のたらいには気をとめようともしない。女中はこの有様をみて、李五のところ

にいつて報告した。

「ご主人様のあの旅人は生意気な奴です。洗面用の銀たらいを
みても、つまらない物のように投げ出して、みむきもしません」
「そうか、あしたから黄金のたらいを出しなさい」

翌朝、女中は黄金のたらいに水を入れて持っていくと、旅人はや
はり顔を洗い手を清めると、みるも目ばゆい黄金のたらいには気も
とめずに、さっさと自分のへやに引き上げた。

二度びっくりした女中は、また主人のところに来て報告した。

「やっぱり生意気な奴です」

「そうか、では今度は家宝にしているあの玉のたらいを出して、
使わせなさい」

李五は不きげんな顔一つせずに、こう命じた。翌朝、こんどこそ
はと思つて、女中は珍しい玉のたらいを持っていったが、旅人はや
はり平気な顔。あとでまた女中からこの話をきかされた李五は、別
に不愉快な顔もせずに行った。

「かまわん、すぎないようにさせなさい」やがて、旅人は郷里に
帰ることになった。彼は主人に永い間の世話を感謝したあとで、

「ちょっと申しにくいことですが、故郷に帰るのに無一文で困
つています。少々お金を貸していただきたいのですが……」
と申しこんだ。李五は一つもためらわずにたずねた。

「いくらご入用でしょうか？」

「そうですね、まあ五百両位あれば結構です」

その当時五百両といえは大した金額で、しかもお互にみずしらず
の他人、さすがの李五も、ちょっとあきれてしまったが、もともと
心の広い人だったので、旅人のいうがままに五百両の大金を与えて、
その出発の前夜には盛大な宴まではつて、心よく送つてやった。

それから何年かたった。李五長者の身の上に、大きなわざわいが
起つた。彼の富と名声をねたんだ悪人たちが、彼をある罪におとし
入れようと悪企みを立てた。それで李五は重い罪の容疑を受けて、
遠くはなれた北京の都に送られて、さばかれることになった。

それから幾日かの後、役人たちに護送された李五長者の一行が、
洛陽橋をすぎようとした時のことである。

洛陽橋は石材で造られた有名な大橋であったが、惜しいことに高
さが少し低い。満潮の時には橋の面まで水にひたされることがある。
「よし、もし自分のけんぎがはれて、無事に帰ることが出来た
ら、必ずこの橋を造りなおしてみせる」

李五の使用人の中に挿嘴さしくちという男がいた。彼は意地の悪い人間で、
かねて李五の名声をねたみ、罪に陥し入れようとしている一人だつ
たので、李五の言葉をきくと、

「ふん、万一李五がゆるされて郷里に帰り、いまの言葉を忘れ
ずにこの橋を修築したら、その時はおれも工事に使う麻縄と石
材ぐらい出してやるよ」
とかげでせせら笑つた。

李五の一行が長い旅のあとで、やっと山東省に入った。すると不
思議なことには、一行が通つていく道の両側の田畑に、どれもこれ
も石碑が立つていて、しかも「福建省泉州府李五所有地」という文
字が書かれてあつた。

李五は自分がこういうところに土地を沢山買ったおぼえがないが、
泉州府の李五といえは、自分より他にないはずだし、不思議でなら
ないので、土地の者をさがして、

「もし、ここに書かれてある李五さんというのは、一体ど
んなお方でしょうか？」

とたずねた。土地の者の語るところによると、この山東省一ばんの大金持さんである張四というかたが、商用で福建省にいて災難にあい、無一文になったことがあった。その時福建省の長者李五という人に助けられ、無事に帰ることが出来たので、「李五」という人こそ本当の長者である」と大いに感服し、その時借り金をかえさないうで、ここに土地を買い、それを李五の名義にして、毎年ふやしているのだという話。

この時、李五ははじめて数年前わが家をおとすれた旅人が張四さんだったことが分った。彼は都についてから早速手紙を出して、現在自分の苦しい立場をしらせ、何か方法をこうずるよう頼んだ。

手紙を受取った張四は、昔の恩人が悪人におとし入れられたことを聞いて大へん驚き、手をつくして調べた結果、沢山のお金がいるというので、かつて李五にかえずつもりで買い増した土地を全部売りはらい、数万の大金を持って都へかけつけた。

都では李五の裁判が行われている最中、もと／＼お金に関係したことなので、張四の持参して来たお金で無事に解決し、李五は晴れて再び自由の身になった。二人は手を取り合って喜んだことは申すまでもない。

やがて故郷に帰った李五は、以前自分が言った通りに、洛陽橋の改造にとりかかったが、その費用も張四が土地を売ってくれたお金の残りで充分間に合った。困ったのは、かつて李五が洛陽橋を改造する時には、それに使う石材と麻縄ぐらいは寄附すると大言壮語した挿嘴で、しかたなくその麻縄と石材を出すことになったが、何しろ長さ三千六百尺もある大きな橋で、麻縄と石材の量も大したもので、彼はそのためにとう／＼破産してしまつたとき。

これは福建省内で語り伝えられた伝説「李五洛陽橋を造る」が清朝の移民とともに台湾に伝来し、それが台湾の民話として変貌し、「李五と旅人」という文芸味の濃厚なものに変わったものである。

これをその母型である「李五洛陽橋を造る」と比較すれば、物語の中には「張四」という副役が加えられ、単なる善行美譚であったものが、強烈な報恩譚に変わっている。主役の善行が伏線的な存在になり、文芸味がず／＼と深くなっている。それに張四の身分を暗示するために使われた各種のたらいなども面白くて、意義深い。

台湾人の祖先の故郷であった華南の民間説話が、清朝の移民とともに伝来されて、そのまま残るものもあるけれども、大概は変貌を来しているが、必ずしも皆が皆よりよく変貌したとは言えない。その中でもこの「李五と旅人」などは、時代的経過と空間的変移で大きな変貌を来しながら、ます／＼立派な民間文芸になった一番よい例であると思う。

また、注意すべきは、洛陽橋という特定の対象にまつわる民間説話が、「烏龜渡」という神話から出発し、それが橋の改造にもなつて「李五洛陽橋を造る」という現地での伝説が生れ、台湾の遠地に伝わってからは、当然伝説としての色彩が消失し、民話的な要素を帯びて、「李五と旅人」という文芸味ゆたかな民譚に変貌しているなども、変り種の一つではないかと思考している。

勿論、「李五と旅人」の中で、潤飾上のあやまりがあったのは免れない。たとへば、李五が橋を改造したのは明朝、その時の都は南京で、泉州から出発した囚車は、北方の山東省を廻らなくても南京に到着するはず。民間説話の地理学的或は歴史学的なあやまりは、あまり物語のキズにはならないことは申すまでもない。

(し) すいほう・中国文化学院教授